

毎月11日掲載

防災・減災のページ

第91回巡回ワークショップ

🐾 仙台・宮城野区

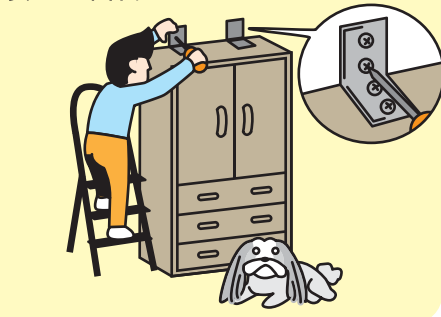
人もペットも命守ろう



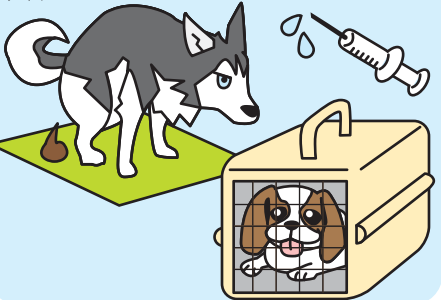
飼い犬4匹も参加し、ペット同行避難について活発に意見を交わした。4日、仙台市宮城野区の県獣医師会館

ペット(犬)と同行避難するための準備

家具の転倒防止など、飼い主とペットの安全を確保する



排せつやペット用のおりに嫌がらずに入るしつけ、予防接種などソフトの備えも大切



監修 減災・復興支援機構

ペット同行避難に参加し、避難所では飼い主がペットの世話をすることを示す



食料や薬などペット飼育用品が一定量あるように使った分を補充しながら備蓄する



イラスト 多田健一郎

環境省 13年に初の救護ガイドライン、18年に改訂

東日本大震災の教訓から環境省は2013年に初めて、大規模災害発生時のペット救護策を示すガイドラインを作成し、飼い主がペットと一緒に避難する同行避難の原則を打ち出した。熊本地震の反省を踏まえ、18年に改訂した。

ガイドラインは飼い主の心構えとして①ペットとの同行避難は飼い主の安全確保が前提②食料、常用薬などペット飼育用品を備蓄③排せつやペット用のおりに入るしつけのほかに、予防接種もしておくなどを挙げている。

大震災では、鳴き声やアレルギーマークを理由に避難所にペットが入れないケースがあった。一方でペットが自宅に取り残されたり、飼い主とはぐれたペットが放らるなど、同行避難しない場合の弊害も浮き彫りになった。熊本地震でも、避難所でのトラブルが多発し、車中泊やテント泊などが目立った。このため改訂版はペットの安全を守る責任は飼い主にあることや、同行避難が避難所での同居を意味しないことを強調。飼い主に迷い犬対策としてマイクロチップの装着、自治体には飼育スペースの確保といった受け入れ

マイクロチップ装着も促す



2018年6月に宮城県利府町で初めて実施されたペット同行避難訓練

「同行避難」の原則明示

東日本大震災の教訓から環境省は2013年に初めて、大規模災害発生時のペット救護策を示すガイドラインを作成し、飼い主がペットと一緒に避難する同行避難の原則を打ち出した。熊本地震の反省を踏まえ、18年に改訂した。

ガイドラインは飼い主の心構えとして①ペットとの同行避難は飼い主の安全確保が前提②食料、常用薬などペット飼育用品を備蓄③排せつやペット用のおりに入るしつけのほかに、予防接種もしておくなどを挙げている。

大震災では、鳴き声やアレルギーマークを理由に避難所にペットが入れないケースがあった。一方でペットが自宅に取り残されたり、飼い主とはぐれたペットが放らるなど、同行避難しない場合の弊害も浮き彫りになった。熊本地震でも、避難所でのトラブルが多発し、車中泊やテント泊などが目立った。このため改訂版はペットの安全を守る責任は飼い主にあることや、同行避難が避難所での同居を意味しないことを強調。飼い主に迷い犬対策としてマイクロチップの装着、自治体には飼育スペースの確保といった受け入れ

助言者から



東日本大震災の体験を振り返り、専門家と共に防災の教訓や避難の課題を語り合ってきた。市内各中学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(21)1501。

次回のむすび塾は25日、山形県遊佐町で開催します。

飼い主の責任自覚必要

同行避難の普及を目指す、飼い主自身が避難所を開設するためのスターターキットを作った。「ペット避難の受付を作る」など、必要事項を書いたカードと指示物を衣装ケースに入れて避難所に保管しておけば、カード通りこなすことで誰でも開設と運営ができる。

ペット用のおりに嫌がらずに入れるようにしたり、ペット飼育用品を使いながら補充して備蓄するなど、普段の備えが被災時のハードルを低くする。防災訓練に参加して、地域に受け入れてもらえるよう行動することも大切だ。できることを積み重ね、まず飼い主の防災力を上げてほしい。

同行避難の普及を目指す、飼い主自身が避難所を開設するためのスターターキットを作った。「ペット避難の受付を作る」など、必要事項を書いたカードと指示物を衣装ケースに入れて避難所に保管しておけば、カード通りこなすことで誰でも開設と運営ができる。

ペット用のおりに嫌がらずに入れるようにしたり、ペット飼育用品を使いながら補充して備蓄するなど、普段の備えが被災時のハードルを低くする。防災訓練に参加して、地域に受け入れてもらえるよう行動することも大切だ。できることを積み重ね、まず飼い主の防災力を上げてほしい。

東京都獣医師会事務局長
NPO法人アニス代表

平井潤子さん(59)

ガイドラインはペットの健康を守る責任は飼い主にあると明記した。責任を果たすには、飼い主が事前に安全確保策を講じ、災害発生時には自分とペットの命を守る行動を取るべきだろう。

東日本大震災、熊本地震ではペットが原因で逃げ遅れたり、避難所に行けなかったりした人もいた。飼い主の防災力が高くと、自分や家族、ペットの命を守るだけでなく避難所運営や地域の復興の力にもなる。

■むすび塾に参加して

宮城県獣医師会と連携

獣医師、飼い主ら語り合い

河北新報社は4日、宮城県獣医師会と協力し、通算91回目の防災巡回ワークショップ「むすび塾」を仙台市宮城野区の県獣医師会館で開いた。獣医師や獣医師会認定ボランティア、ペットの飼い主10人と犬4匹が参加。ペット同行の避難をテーマに、必要な備えや地域との関係づくりについて語り合った。

むすび塾



●避難所運営体験キットの説明を聞く参加者ら。中に入った犬は「待て」の指示をする参加者ら。語り合い中、飼い主に寄り添い待機する小型犬



●8年前が出发点 日本でのペット同行避難の取り組みは8年前の震災が出发点になっている。命をどう守るかの一点に尽きる。震災後も災害は続いており、まずはガイドラインに沿った自助を浸透させ、共助や公助の部分は地域の獣医師会と自治体が連携して進めてほしい。花園動物病院獣医師 中川正裕さん(62)



●病気や体質議論 震災時、ペットと一緒に避難した住民が避難所に入るのを拒まれたケースがあった。避難所を巡っては、人間とペットの双方が抱える病気や体質、ストレス、衛生面など検討すべき課題が多い。「ペットを救うのは人を救うこと」という考え方を広めていきたい。小野寺動物病院獣医師 小野寺秀之さん(49)



●行動面の備えを 行動面での備えも必要だ。犬をペット用のおりに入れたり、柱にリードをつないだり、普段しない動きをトレーニングで経験させるべきだ。現在は、主に山形県で飼育の助言をしている。災害時にペットの支援を他県と協力しながら広域でできないか考えたい。宮城県獣医師会動物救護アドバイザー 板谷智子さん(46)



●災害対応を学ぶ 震災後、被災動物の写真を撮っていた縁で被災者からペットを預かってもらえないかと相談を受けるようになった。資格を取り、現在は写真撮影とペットの世話代行を仕事にしている。むすび塾に参加して災害対応の知見が深められた。今後はワークショップや講座に参加したい。ペットシッター 飯島和彦さん(55)



●自分の健康留意 6歳の大型グレートピレニーズの「さくら」を飼っている。普段からドッグフードを7・5発ほど自宅に置くなど、災害に備えている。散歩することが多い。いざというときにペットの命を守るように、飼い主は自分の健康も大事にしなければいけないと思う。会社員 菅原義男さん(65)



●猫の避難は困難 犬1匹、猫7匹を飼っている。さまざまな備えはしているが、猫は数が多く、避難に不安がある。獣医師から専門家でも猫に備えてほしい。散歩することが多い。いざというときにペットの命を守るように、飼い主は自分の健康も大事にしなければいけないと思う。会社員 菅原義男さん(65)



●多様な経験必要 飼っているのは7歳のシベリアンハスキーの「シュアン」。日ごろから訓練をしているので、おりに入ることはできるが、家族が離れたときにどんな反応をするかなどの不安がある。避難訓練でいろんな状況を経験しながら課題を見つけて、災害時に問題が起きないようにしたい。会社員・今村志麻子さん(50)



●訓練で意識変化 塩釜市のペット同行避難訓練に参加した際、5歳のシーズー「福丸」の性格なら大丈夫と思うなら、係留されて飼い主が見えないと落ち着かなくなるなど想定外の行動を取った。訓練は大事。災害に備え普段何をすればいいか、意識が変わるきっかけになる。今後も参加したい。会社員・高橋咲子さん(44)



●大用カイト調達 12歳になるキャバリアの「ジェット」は心臓が悪いので震災後、犬を乗せて逃げるカイトを買った。フード購入先も量販店から災害時に頼れる地域の動物病院に変えた。避難所におりに用意するなどの備えについて暮らしている利府町の町内会と相談したい。人もペットも命を守ることが大事だ。町内会役員・横堀正昭さん(52)



●慣れさせて対応 動物病院で週1回、生後3〜4カ月の子犬を対象にしたしつけ教室を開いている。あらかじめ人や犬に慣れさせれば、非常時の環境の変化にも落ち着いて過ごせる。ペットの行動が気になり、避難所で肩身の狭い思いをしがる飼い主の精神的な負担も減らせるはずだ。このためこねこ教育アドバイザー 小松伸枝さん(42)

